

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. II, 2005

仙石山論集 第2号（平成17年）

日本における『金七十論』とその注釈書について

興
津
香
織

日本における『金七十論』とその注釈書について

興 津 香 織

はじめに

仏典はサーンキヤ学派とヴァイシェーシカ学派の思想に言及し批判することが多い。そしてそのことは、この二つの学派の注釈書である『金七十論』（真諦訳）と『勝宗十句義論』（玄奘訳）だけが漢訳され大蔵經に収蔵されているという事実と相俟って、仏教徒の側にとつて、その二学派に対する関心は非常に高かったであろう事が推察できる。

そのうち、サーンキヤ哲学の思想を仏教徒はどのように見てきたのかを考察したい。ところで『金七十論』は漢訳だけが現存するが、中国では『金七十論』に対する注釈書は書かれることがなかったようである。^①

他方、日本において早くから『金七十論』（僧佉論）が書写されたことは天平写經の中にその名が挙げられていることから知られる。『正倉院文書』には以下のような記載がある。^②

『金七十論』二卷 欠第一（奉写一切經所解、天平宝字五年三月二十二日）、（『大日本古文書』第四卷四九八頁）、

『金七十論』三卷 亦名僧法論或二卷（可請本經目錄、天平勝宝四年正月二十五日）、（同第十二卷二二五頁）、
『金七十論』三卷 亦名僧法論或二卷（未寫經律論集目錄、天平宝五年五月七日）、（同第十二卷五六二頁）、
『金七十論』二卷 欠第一（奉写一切經所解、天平宝字五年正月六日）、（同第十五卷四四頁）
これによると、現存の『金七十論』と同様に三卷本であったことが知られる。なお、このほかにも次の記述がある。

『金七十論議』三卷（写疏所解、天平十九年六月七日）、（同第九卷三九三頁）
書名に「議」を加え、しかも写疏所に関係するので注釈の可能性も否定できない。

そして『金七十論』に対する注釈書で現存するのは江戸時代中期（十八世紀）になってからのものである。しかしそれらの注釈書のうち一部が公刊されたにとどまり、その他は現在全く顧みられていない状態である。なお江戸時代以前における『金七十論』をめぐる状況は未詳である。

よって本稿では江戸時代における『金七十論』の状況と、その注釈書としてはどのようなものが存するのかに加えてその著者たちをまず明らかにしたい。ついで、「金七十論跋」を記し江戸時代の『金七十論』の単行出版に関係したと考えられる如海日妙（生年不明一七一）について触れ、最後に仏教外の文献である『金七十論』を解釈・解説するために江戸時代の学僧たちがどのような文献や資料に基づいているのか、また学僧たちの共有していた知識やそれぞれの注釈書の特徴はどのようなものであるか、等を検討することによって、その時代の文献学的研究の方法の特徴を説明するための手がかりとして、代表的な三つの注釈書である曉応嚴藏（享保九（一七二四）年一天明五（一七八五）年）の『金七十論備考』（以下『備考』と略す）、智幢法住（享保八（一七二三）年一寛政十二（一八〇〇）年）の『金七十論疏』（以下『疏』）、林常快道（宝暦元（一七五一）年一文化七（一八一〇）年）の

『金七十論藻鏡』（以下『藻鏡』）について言及する。

江戸時代における『金七十論』

『金七十論』は中国において真諦（四九八―五六九）が五四八―五六九年の間に漢訳した。中国でその後どの程度読まれたかは今後また別に調査・研究すべき課題である。『金七十論』はあらゆる一切経に収録されているが、日本における最初の単行出版は江戸時代に開板されたものであろう。それ以後、二百年にわたって様々な注釈書が作られていった。以下にその状況を示す。

『金七十論』（三巻）の出版については『仏書解説大辞典』における『金七十論』の解説によると元禄十（一六九七）年刊とされるが、最初の上版は元禄乙亥（一六九五）年であつたらしい。

- 一、元禄乙亥（一六九五）年…京都・著屋宗八刊
 - 二、元禄乙亥（一六九五）年…京都・澤田友五郎刊
- この書は一と版元は異なるが、一の再版である。以下は同じものの重版である。
- 三、元禄十（一六九七）年…京都・村上平樂寺重梓
 - 四、寛政七（一七九五）年…京都・著屋儀兵衛求板
 - 五、出版年記載なし…京都・永田長左衛門刊
 - 六、明治期…京都・永田調兵衛刊

日本における『金七十論』とその注釈書について（興津）

『金七十論』の刊本には如海日妙による次の跋（元禄乙亥の記年がある）が付せられていた。

金七十論跋

外道二十五諦但知名數而不解其義者惟多也依此余暇日繙此論加倭訓而梓行也嗚呼竺乾外道之智勝支那孔老之道也遠矣況乎吾 迦文法王微妙甚深之法不待言辭可信其高遠而止矣加點既卒仍題數語爲之跋焉

皆

元禄乙亥臘月穀日

總之州飯高妙雲山法輪講寺住侶如海謹識

金七十論跋

外道の二十五諦は但だ名數を知るのみにして而も、其の義を解せざることとは惟れ多きなり。此れに依りて余は暇日に此の論を繙き、倭訓を加へ而して梓行するなり。嗚呼、竺乾の外道の智は支那の孔老の道に勝るのと遠し。いはんや吾（釈）迦文法王の微妙甚深なる法は言辭を待たずして、其の高遠なるを信ずべし。而して止むや。加點既に卒するに仍りて、數語を題して之を跋と爲す。

皆に

元禄乙亥臘月穀日

總の州飯高妙雲山法輪講寺住侶如海謹識

この跋によって、如海の『金七十論』に対する考え方を知ることができる。数論についてはこれまでその意味について理解されてきたとはいえず、自ら『金七十論』に倭訓を加え出版したこと。また『金七十論』をはじめとしたインド哲学は仏教には敵わないが、中国の孔子や老子の思想より優れているとしているのである。

『金七十論』の刊行は如海が加点了した版本を使って繰り返し出版されていたことになる。

如海日妙に関してはその生涯などの情報は全くといっていいくらい得られない。ただ『日蓮宗宗学章疏目録』にその名を見出すことができる。それによると、日妙は字が如海で大円院と号す。日蓮宗仙台孝勝寺二十一世であり正徳元年六月六日に没する。またその著作は、『片玉集』一卷（寛永年中著）、『筆乘』一卷（貞享四年著）、『天台智者大師紀年録』一卷（享保元年刊）、『天台智者大師紀年録詳解』二卷（享保三年刊）、『銅臭記』一卷である。

江戸時代における『金七十論』の注釈書

つぎに、『金七十論』の注釈書についてみていきたい。目録等を調査してみると、江戸時代中期以降にかなりの数の注釈書が書かれたことが明らかとなった。⁽³⁾この突然と言ってもいいような注釈書の出現の背景には、当時における国学・儒学を含めた文献学的研究の隆盛があったと考えられる。現在判明している注釈書の数には散逸したものを含めて二十六、作者は十七人（作者不明の書が三）に上る。

以下に、現時点で判明している注釈書を年代順に提示する。年代順といっても、著者の生存年代と注釈書の成立年代（わかるもののみ）とによってならべているため確定できる段階ではなく、不明瞭な点も多い。また実際に見ているものは少なく、国書総目録や人名辞典等々、目録上の調査のみの書もあるため、今後実地に調査したい。

所蔵先について三康・椎尾文庫とあるのは『三康図書館椎尾文庫目録』（昭和五十六年）から、東北大とあるのは『東北大学所蔵和漢古典分類目録』（昭和五十一年）から、龍谷大とあるのは『龍谷大学蔵書検索システム』から、駒沢大とあるのは『駒沢大学蔵書検索システム』から、大谷大とあるのは『大谷大学図書館和漢書分類目録』（大正十四年五月）あるいは大谷大学図書館『林山文庫目録』（昭和五十九年）あるいは『瑞蓮寺文庫目録』（平成十年）から、日比谷図書館（現・都立中央図書館）・井上文庫とあるのは『日比谷図書館・井上文庫目録』（昭和三十一年）から引用したものであり、その他の所蔵先や著作に関する情報についてはその都度提示する。

〈凡例〉

作者「宗派」（生没年）、『』内は題名、成立（出版）年代、出版地・出版者、「現在の所蔵先」、その他。

①如海日妙「日蓮宗」（生年不明～一七二一）

『訓点』

この書は現在、散逸して伝わらないとされる。⁽⁴⁾

また『統豊山全書 解題』（昭和五十五年、一八二頁）で北條賢三博士は

如海『金七十論』一卷 元禄八（一六九五）年写本

という書を挙げて、「仏典を引用しながら、用語の真意を説いている手摺本である。」とされる。

②無着道忠「臨濟宗」(二六五三―一七四四)

『数論外道計略図』

この書は現在、散逸して伝わらないとされる。⁽⁵⁾

③香山宗朗「真宗・本願寺派」(生年不明―一七八八)

『金七十論解』三卷

版本…明和元(一七六四)年の序「三康図書館(以下三康と略す)・椎尾文庫」

卷上存一冊、一止人藏

安永二(一七七三)年癸巳五月、皇都書肆 村上勘兵衛・齊藤莊兵衛・額田正三朗刊「龍谷大、駒沢

大」

出版年記載なし…「大谷大、東洋大」(国書総目録)

卷上しか残っていない三康の目録には明和元年序刊とのみ記載されているが、実際にはその序、本文ともに安永二年の版本(駒沢大学所蔵)と同じものである。また出版年記載なしとされた東洋大学所蔵の刊本も安永二年と記されており、同じ版本を使用している。しかし駒沢大所蔵の刊本は上中下巻が一冊にされているのに対し、東洋大所蔵のものは上巻、中下巻の二冊本となっており、卷上しか残っていない三康のものと同じ二冊本であったかもしれない。東洋大所蔵と三康の刊本が全く同じものであることを裏付けけるもう一つの点は、駒沢大の刊本では序文の最後に記された「明和改正春正月」という文字が、東洋大、三康ともに「明和改元春正月」となっていることである。

そのなかでも最も注目すべき点は、版本が同じであるにもかかわらず、東洋大所蔵の刊本には駒沢大所蔵の刊本にない文が下巻の巻末に加えられていることである。東洋大所蔵の刊本には以下の文が付け加えられている。

八丁左

前四法等善惡^一業雖落調去其習氣薰中陰色受苦樂^二報从諸内教彷彿見之彼未知有意識故於前五識从知耳

『金七十論解』は『金七十論』に見られる語や文章を取り上げてそれぞれについて解説を加えた書である。この付け加えられた文は、『金七十論』巻下の八丁の右にある「前四法薰習。」（『大正蔵』五十四卷、一二五九頁上段二三行）以下の説明である。

④ 暁心嚴蔵「真宗・大谷派」（一七二四～一七八五）

・『金七十論備考』三卷

版本・明和六（一七六九）年丑五月、錢屋庄兵衛・村上勘兵衛刊

「高野山真別処、東海女子短大・関山文庫、三康・椎尾文庫、駒沢大、大谷大、龍谷大」

三康と駒沢大所蔵の刊本には『備考』本文の前に金七十論本頌（第一頌～第七十一頌）が付けられている。龍谷大所蔵の刊本には「錢屋庄兵衛・村上勘兵衛」という奥付の次頁に「皇都書林 菱屋亦兵衛」とある。

・『金七十論備考会本』三卷

『金七十論備考』は明和六年五月に『金七十論』本文を伴わない注釈のみで上梓されたが、明治十九年（一八八六）に蘆津実全が『金七十論』の本文を組み込んだ会本を梓行し流行した。しかし以下に示すように、異なる二つのタイプの奥書を有する刊本がみられる。

明治十九年三月二日版權免許
同 年四月二十五日出版

和歌山縣士族

編輯人

蘆津實全

東京京橋區南鍋町壹丁目六番地寄留

東京府平民

出版人

大内青巒

東京麻布區本村町百九十四番地

發行所

東京南鍋町壹丁目六番地

鴻盟社

同麻布北日下窪町貳番地

同第一分店

印刷所

秀英舍

發賣所

東京三十三間堀町壹丁目貳番地

東京飯倉町五丁目

東京淺草廣小路

東京淺草北松山町

東京南傳馬町貳丁目

明教社

森江佐七

淺倉久兵衛

伊藤清九郎

宇田惣兵衛

日本における『金七十論』とその注釈書について（興津）

日本における『金七十論』とその注釈書について（興津）

四〇

京都三條通高倉東入堺町

出雲寺文治郎

京都六角通寺町西入

小川多左衛門

京都花屋町通油小路

永田調兵衛

尾州名古屋門前町

三浦兼助

この奥書を有する刊本は明治十九（一八八六）年、蘆津実全編で東京鴻盟社のものであり

東北大、龍谷大、駒沢大、大谷大、日比谷図書館・井上文庫が所蔵している。また東北大、龍谷大、日比谷図書館・井上文庫所蔵の刊本には曹洞宗大學林蔵版という併記も見られるがこの点に関しては未調査である。
もう一つのタイプの奥書は以下の通りである。

明治十九年三月二日版權免許

同 年四月二十五日出版

東京府平民

編輯兼出版人

大内青巒

麻布區北日ヶ窪町二番地

發賣所

森江佐七

麻布區飯倉五丁目四十四番地

『仏書解説大辞典』三二二頁にある『備考会本』は大内青巒（弘化二（一八四五）年～大正七（一九一八）年）編と

なっているが、この奥書を持つ刊本のことを言っているのである。高野山大、帝國（上野図書館、現在は国立国会図書館に統合）、京都（東寺）専門学校、大谷大所蔵とある。

以上の二つの奥書を見ると、蘆津実全と大内青巒がそれぞれ編集したかのように見受けられるが、実際には同じ書である。前の書では編集人が蘆津実全で出版人が大内青巒となっているのに対し、『仏書解説大辞典』で言及された書には蘆津実全の名はなく、編集兼出版人が大内青巒となっているのである。

活字翻刻…『日本大藏經（増補改訂）』第五八卷「金七十論章疏」（昭和五十年）所収。

⑤智幢法住「真言宗・豊山派」（一七三三―一八〇〇）

・『金七十論疏』三卷

写本…寶曆十三（一七六三）年奥書本「三康・椎尾文庫」

目録によると『金七十論釈』という題名であるが注記として、金七十論疏、四卷、達磨底瑟叱「釈法住」、江戸写、（三余文庫旧蔵）となっており、これは『金七十論疏』に該当する。

文化二（一八〇五）年「龍谷大」

英嶽写、書写地不明、巻上の刊記…文化二年（一八〇五）写

文化九（一八二二）年「大谷大」

標題に「金七十論沒駄弗多羅達磨底瑟叱疏」、尾題に「金七十論釈」、巻末に「干時文化九申秋写成 秘密一乘宗沙門快応」

書写年不明「京大」（国書総目録）

日本における『金七十論』とその注釈書について（興津）

龍谷にはこの『金七十論疏』と、快道作の『金七十論藻鏡』の二篇合綴の写本もある。これは『金七十論藻鏡』のところで説明する。また『金七十論疏』については龍谷大の写本は『日藏』の底本と同系統であるが、谷大の写本は明らかに別系統で、谷大本が勝っている場合が往々にしてあるとされる。それに基づいて検討すると、三康の『金七十論釈』（四卷）は谷大本の系統であり、つぎにあげる『続豊山全書』第十六卷「因明・外道部」所収のものは龍大本の系統である。

活字翻刻…『日本大藏經（増補改訂）』第五八卷「金七十論章疏」（昭和五十年）所収。『続豊山全書』第十六卷「因明・外道部」^⑥。

・『金七十論私記』二卷

この書を法住の著作としてあげている辞典類は多数あり、^⑦『豊山小史』^⑧の著作目録にも『金七十論私記』二卷とある。

⑥林常快道「真言宗・豊山派」（二七五―一八一〇）

・『金七十論藻鏡』一巻

写本…嘉永四（一八五二）年「龍谷大」

純亮写、書写地不明

二篇の合綴（『金七十論藻鏡』快道撰／『金七十論疏』三卷達磨底瑟陀撰）

〈別書名〉表紙のタイトル…『金七十論疏藻鏡』、その他のタイトル…『金七十論疏講録』、見出しタイト

ル…『金七十論疏講録』、その他のタイトル…『金七十論疏』

明治十（一八七七）年「龍谷大」

了諦写、合綴、墨書…東城貞観、タイトルに『金七十論藻鏡』快道撰。數論二十五諦記／俱舍光記とあるが、詳細は不明。

東北大には『數論二十五諦記』…解俱舍光記、一冊、写本、知新房圓秀写（書写年は記載なし）とある。

書写年不明「京大」（国書総目録）

活字翻刻…『日本大藏經（増補改訂）』第五八卷「金七十論章疏」（昭和五十年）所収。

・『金七十論疏』二卷

・『金七十論私記』一卷

この両書については『埼玉名家著述目録』^⑨と『続豊山全書 解題』^⑩に、快道の著作として『金七十論疏』二卷、『金七十論私記』一卷とあり、両目録とも『豊山小史』の記述によっているが未詳の書である。

・『金七十論高稱記』

『続豊山全書 解題』^⑪に、所在が本山である、とのみ書かれている。

『続豊山全書』「金七十論疏解題」^⑫によると

快道『金七十論高稱記』二卷 天明六年（一七八八）写本 法住の講録を用いているように附題があるが、内容的には『藻鏡』と『論疏』とを合本にしたもので、統一ある注釈書の一つという訳ではない。とされる。

日本における『金七十論』とその注釈書について（興津）

⑦無相「真言宗・豊山派」（一七五七～一八二五）

『金七十論講要』三卷一冊

写本・寶曆九（一七五九）年「大谷大、三康・椎尾文庫」

大谷大においては『大谷大学図書館和漢書分類目録』と『林山文庫目録（大谷大学図書館）』の両方にこの書の記述がある。

写本の作られた年とこの無相の生存年代を考えると、他の無相という人物が『金七十論講要』を作ったと考えた方がよいかもしれないが、この無相は年代的に先の快道と関連するところがあるため、影響を受けた可能性もある。

⑧東溝大賢「真宗」（一七五八～一八三二）

『金七十論撮要』

『日本大藏經』「金七十論備考会本」解題¹³には、『金七十論撮要』とあるが、『国書人名辞典』には『金七十論提要』とある。

⑨海応「真言宗・智山派」（一七七一～一八三三）

『金七十論啓義』三卷三冊

複製本・『智山全書』（昭和四十年）第十八卷所収。

⑩信慧「真言宗・豊山派」(一七七六―一八四六) 一説に(一七八一―一八四六)
『金七十論探蹟』一冊

写本…文政四(一八二二)年「大谷大」

⑪烏水宝雲「真宗・本願寺派」(一七九一―一八四七)

・『金七十論私記』

写本…書写年不明「大谷大」

『大谷大学図書館和漢書分類目録』には『金七十論私記』とある。また『林山文庫目録(大谷大学図書館)』には『金七十論記』、宝雲、筑前 惠慶 片写、一冊 とある。

・『金七十論烏水録』二卷

写本…書写年不明「大谷大」

・『金七十論聴記』一冊

写本…書写年不明「龍谷大」

また龍谷大には著者名は記載されていないが、書名を題簽により『金七十論聴記』とした書が別があり、そこには「一冊、〈別書名〉その他のタイトル…『金七十論聴記』、見出しタイトル…『金七十論開延』」とある。前者の『金七十論聴記』には宝雲述とあるため両書を比較することにより、後者が宝雲の著書であるか否かは判断できると考えられる。

日本における『金七十論』とその注釈書について（興津）

四

⑫ 桂潭「真宗・本願寺派」（一七六二～一八二二）

『金七十論録』一卷

『日本大藏経』『金七十論備考会本』^⑭解題、『国書人名辞典』、『仏教大辞彙』、『日本佛家人名辞書』にみられる。これらの辞書が参考になっている『清流紀談』^⑮あるいは『本願寺派學事史』が情報源であり、実際に『清流紀談』と『本願寺派學事史』を参照すると、^⑮桂潭自身について書かれているが『金七十論録』に関する記述はない。

⑬ 闇流臈満（生没年不詳）

『金七十論聴記』一冊

写本・弘化四（一八四七）年、洗心齋写「無窮会・平沼文庫」（『国書総目録』）

先の宝雲の『金七十論聴記』においてあげた龍谷大所蔵の著者名が記載されていない写本とこの『聴記』との関係は未調査。

⑭ 作者不明

『金七十論法相鈔』一卷二冊

写本・安政六（一八五九）年「大谷大」

⑮ 乘願院慶忍「真宗・本願寺派」（一八一六～一八八三）

『金七十論己巳録』一卷

『日本大藏經』第九十八卷解題二「金七十論備考会本」解題（金倉圓照博士、昭和五十二年）二四頁、『仏教大辞彙』、『日本佛家人名辞書』にある。これらの辞書が参考になっている『學苑談叢』^⑬を参照すると、若いころに先にあげた⑪の烏水宝雲について学んでおり、著作の中に『金七十論己巳録』一卷もあげられている。「己巳」は干支をさし、慶忍存世の期間中、己巳は一八六九年（明治二年）に当たるため、この年に著されたと考えられる。

⑬ 藤井玄珠「真宗・本願寺派」（一八二三～一八九五）一説に（一八二〇～一九〇二）

『校註金七十論』三卷三冊

版本・明治二十（一八八七）年、陳積真諦訳、藤井玄珠注、東京・佛書出版会「三康・椎尾文庫、駒沢大、日比谷図書館井上文庫」

日比谷図書館井上文庫目録には東京・佛書出版会ではなく東京・阿部準輔刊とある。三康と駒沢大の刊本の版本は同じものであるが、玄珠の「校註金七十論開題」の前に存する黒田真洞撰・山岡鐵舟書の無題の文章と武田篤初による「校註金七十論序」の二文の配置が三康では「校註金七十論序」が先になっており駒沢大の刊本では後になっている。

⑭ 作者不明

『金七十論筆受』

写本・書写年不明「三康・椎尾文庫」

卷上のみ存

日本における『金七十論』とその注釈書について（興津）

哭

⑮ 亮慧（生没年不詳）

『金七十論記』一冊

写本…萬延三元（一八六〇）年、眞量写「龍谷大」

別名『金七十論聴篇』

『日本大藏経』『金七十論備考会本』解題にも書名が言及されている。^⑮

⑯ 公隆（生没年不詳）

『金七十論聞記』一冊

写本…書写年不明「龍谷大」

⑰ 作者不明

『金七十論忽明録』二冊

写本…書写年不明「駒沢大」

以上の中で、法住作『疏』は金倉圓照博士によって『国訳一切経和漢撰述部四三論疏部二三』（昭和三十三年）に書き下され、脚註を施されている。

三つの注釈書と著者について

先に提示した注釈書をみると、『備考』『疏』『藻鏡』の成立は初期の年代に属する。また「代表的」としたのは注釈書の中でこの三書だけが『日本大藏經』に収められているからというのみならず、快道と法住は戒定(宝暦二(一七五二)年)文化二(一八〇五)年)とならんで「天明の三哲」と称される、まさに当時の大学者でその影響力も宗派を問わず絶大なものであったと考えられるのである。他方、晩応の『備考』についても、明和六年五月に注釈のみで上梓されたが明治十九年(一八八六)に蘆津実全が『金七十論』の本文を組み込んだ会本を梓行し流行したことから永く重視されてきたことが知られる。

『備考』の著者、晩応嚴藏「真宗・大谷派」(一七二四―一七八五)は滋賀県愛知郡の真宗大谷派の光沢寺に男子四人の中の二男として生まれ、その後の経歴は未詳であるが越前丹生郡天津村の大谷派浄明寺の住職となった。『金七十論備考』三卷や『勝宗十句義論試記』二卷を含むいくつかの著書がある。

『疏』の著者である智幢法住「真言宗・豊山派」(一七二三―一八〇〇)は大和国石上樸本に生まれ元文四年に快範に師事。寛保元年長谷寺に登り無等に従って修学。智積院や南都諸寺に遊学し、安永二年一乗院法親王より岡寺を賜る。天明六年権僧正に任ぜられ、寛政三年長谷寺第三十二世となる。同二年没。『金七十論疏』三卷、『金七十論私記』二卷、『勝宗十句義論記』二卷、『十句義決擇』五卷、『十句義教起因縁考』一卷、『十句義極微積集』一卷、『十句義論要義建集』一卷等を含め多数の著書がある。

『藻鏡』の著者、林常快道「真言宗・豊山派」(一七五一―一八一〇)宝暦元年に上野国勢多郡に生まれ、同郡の相応寺において快音に従って出家、得度し、長じて豊山長谷寺で学び密教、唯識、俱舍、性相に通じた。豊山性相学の泰斗といわれる。天明元(一七八二)年に『六合釈精義』一卷を著して法住著『分別六合釈』の説を非難して法住の怒りを買ひ、高野山に移って学んだ。その後、享和二(一八〇二)年に武蔵浦和玉蔵院に住み、江戸伝通院などに招かれて講義をした。文化六(一八〇九)年に江戸(湯島)根生院に移る(江戸根生院第一代)。「江戸

第一の碩学」と称される。文化七年、同院で寂。根生院はその後、寺域が岩崎氏の邸内に入るに及び現在の地（豊島区）に移った。快道の墓は現在元浅草の観藏院にある。『金七十論藻鏡』一卷『金七十論疏』二卷『金七十論私記』一卷『金七十論高稱記』二卷『勝宗十句義論決擇』五卷『勝宗十句義論叢林』一卷『勝宗十句義論聞書』一卷『十句義論決擇』五卷等を含め多数の著書がある。

『備考』と『疏』はサーンキヤ哲学全体に関する概説（序論に相当する）と『金七十論』の各偈文に対する注釈（本論）との二部構成となっているが、これに対して『藻鏡』は注釈書ではなくサーンキヤ哲学に関する概説を仏典の資料に基づいて文献学的に検討した著作である。

現在使用できるテキストは『日本大藏經（増補改訂）』（『日藏』）第五十八卷「金七十論章疏」収められているものである。『日藏』第百卷（目錄・索引）の「日本大藏經既刊文庫資料」によると『備考』は明治十九年刊本、『疏』は安永七年写本を底本としているが、『藻鏡』は「校訂写本」に基づくとしている。また蘆津実全が『備考会本』のはじめに記した「例言」を以下に見てみることにする。

例言

- 一 金七十論流通年久。明和年間越前國丹生郡風卷村淨明寺曉應諱嚴藏著_ニ科註三卷。名曰_ニ備考。盛行_ニ于世。然不_レ載_ニ本論全文。學者憾焉。仍今會_レ之而_ニ其科則分_ニ置諸本之頭。名爲_ニ科圖金七十論備考會本。
- 一 科文每_ニ其段落_ニ置_ニいろは等_ニ且線端附_ニイロハ等_ニ爲_レ令_ニ易_ニ知_ニ科段之起盡_ニ認_ニ線路之位置_ニ也。
- 一 科線相距稍遠者欄上書_下自_ニ何紙左右_ニ來_上。其涉_ニ他卷_ニ者書_下自_ニ何卷何紙左右_ニ來_上。
- 一 舊來流布本模_ニ刻黃檗版_ニ備考亦據_レ之而校_ニ讐鮮本_ニ盡舉_ニ其異。曰_ニ某字一本作_レ某或某字上下一本某字有

無等^一便是也。

一 舊本元禄八年下總國飯高法輪寺如海師加^二倭訓^一而梓行。今本據^二豐山林常快道師之校本^一頗改^レ之。初應永十九年河内國廣度寺良盛師之校本明和七年傳至^二豐山智存師^一。安永七年再傳至^二快道師^一大潤^二飾之^一。因記^二其來由^一云。

一 本論外道所執之說魔界有緣法也。方今外魔乘^レ隙窺^二竅法城^一。勢益猖獗。苟講^二捍禦之術^一者須^二騎^二賊馬^一趁^二賊^一。此書流通欲^二務速^一者蓋爲^レ之也。

明治十九年三月

石蓮

蘆津實全 識

この例言は六つの項目で構成されており、はじめのほうは『備考』についての記述である。それらのあとの五つ目の記述に注目すると、

一 舊本は元禄八年、下總國飯高法輪寺如海師倭訓を加へて而して梓行す。今の本は豐山林常快道師の校本に據て頗る之を改む。初め應永十九年河内國廣度寺良盛師の校本、明和七年傳て豐山の智存師に至る。安永七年再傳して快道師に至りて大に之を潤飾す。因て其來由を記すと云ふ。

とあるように、明治期に把握されていた『金七十論』の流通に関する情報が見て取れる。⁽¹⁸⁾ここで新たに登場する良盛は浄土宗の僧で、生年は不明であるが陸奥専称寺の良拾に浄土教を学びその法を嗣ぐ。一六〇五年頃仙台に大願寺を開き、慶長十一（一六〇六）年九月八日に没す。年代は重ならないが、如海日妙は日蓮宗仙台孝勝寺二十一世であったことから仙台という共通点がある。

また先の如海の「金七十論跋」と蘆津實全の「例言」とを比べてみると『金七十論』に対する考え方が大いに異なっている。「例言」の最後をみると、

一 本論は外道所執の説にして魔界有縁の法なり。方に今、外魔隙に乗じ法城を窺竅す。勢い益猖獗なり。苟も捍禦の術を講ずるは、須く賊馬に騎て賊を趁ふべし。此書の流通務て速なるを欲するは盖し之が爲なり。というように一刻も早くこの『備考会本』が流通することにより、仏教を圧倒しようとして勢力が盛んになりかけている外道を阻止するのだと表明している。これは明治期における蘆津實全に特有の考え方であると必ずしもいえない。というのは、この文章中にある「魔界有縁の法」なる語は『備考』の最後にある暁応による以下の偈にみられるものだからである。

絶筆述懷偈曰

如來所説真正法 人法無我為法輪

此論魔界有縁法 為辨邪正作分別

他方、『疏』の解題では「この『日蔵』の底本は長谷寺勸学院の珍襲本で、その奥書に「安永七戊戌天潤七月、（中略）林常快蓮」とあり、快蓮は快道のことであるから、この底本が彼の手沢本として信頼すべきものであることを表している。」とされている。¹⁹⁾

以上のことに加えて、『藻鏡』において『備考』や『疏』などへの言及がみられることから快道は先の二書を読んだ上で『藻鏡』を著したことが明らかである。

注

(1) 真諦は經典を訳出する際、それについて講義を行ない、注釈書を作っていることが通例となっていたようである。そのため、『金七十論』についても注釈書を著した可能性があるが、本多恵『サーンキヤ哲学研究』(上)(春秋社、昭和五十五年)五八九頁)に、

経録にも、真諦が『金七十論』に注釈書を著したとする記述はない。

とあるように、現在真諦による注釈書は見つかっていない。

また『仏書解説大辞典』第二卷三一一頁に

『金七十論釈』三卷、欠、梁真諦(永元元〜太建元 四九九〜五六九年) 訳

とあり、その典拠として『浄土真宗教典志』を挙げている。そこには「天親論主著述」として、

金七十論釈三卷〔真諦訳○此是数論外道之書。天親作釈。出唯識述記三十三。此有異説。如衍繹編第二述〕

とある。(『三卷本浄土真宗教典志』卷第一(『新編 真宗全書』史伝編九、昭和五十二年)一三三三頁)

しかし、金倉圓照博士は『国訳一切経和漢撰述部四三論疏部二三』『金七十論疏解題』(昭和三十三年)二六〇頁註において先の『仏書解説大辞典』記述について、

『浄土真宗教典志』を参考としているが、誤りであり元來金七十論そのものを意味するため、中国に注釈書があった例証とはならない

とされている。

(2) 『奈良朝典籍所載仏書解説索引』(木本好信編、国書刊行会、平成元年)六一、六二頁参照。

(3) 『金七十論』の注釈書については『仏書解説大辞典』(第二卷三一一頁以下)にある六つの注釈書が一般的に知られている。(法住『金七十論疏』、曉応『金七十論備考』、快道『金七十論藻鏡』、宗朗『金七十論解』、信慧『金七十論探蹟』、

日本における『金七十論』とその注釈書について(興津)

日本における『金七十論』とその注釈書について（興津）

五

玄珠『金七十論校註』

また『外道哲学』（井上円了）六一六頁には以下のような注釈書が提示されているが快道の『藻鏡』はあがっていない。

宗朗『金七十論解』二卷、曉応『金七十論備考』三卷、実全『金七十論備考会本』三卷、法住『金七十論疏』三卷、玄珠『金七十論校註』三卷。

(4) 『日本大蔵経（増補改訂）』（日蔵）第九十八卷「金七十論備考会本」解題二四頁（金倉圓照博士、昭和五十二年）を参照。

また『東北大学所蔵和漢古典分類目録』には

『金七十論』三卷三冊 陳釈真諦訳・釈如海訓点 元禄十年、京都村上平楽寺
とあるが、前述の元禄八年に如海が訓点を加えて出版された『金七十論』である。

(5) 『日本大蔵経（増補改訂）』（日蔵）第九十八卷「金七十論備考会本」解題二四頁を参照。

(6) 昭和五十三年、真言宗豊山派宗務所内統豊山全書刊行会により出版。底本には総本山長谷寺所蔵の写本が用いられている。「由緒の正しい底本に拠っているから、現在では最もすぐれた原本と思われる。」（『国訳一切経和漢撰述部43論疏部二三』『金七十論疏』解題補筆（金倉圓照博士、昭和五十五年）五七一頁）

(7) 『金七十論私記』（二卷）を法住の著作にあげている辞典類は、「日本仏家人名辞書」「密教辞典」「密教大辞典」「仏教大辞彙」等で、『望月仏教大辞典』は『金七十論疏私記』（二卷）としている。この情報源は以上の辞書類が参考書としてあげた「法住和上伝」であると考えられる。

(8) 『豊山小史』…田中海應編、大正十三年、一四八頁、第三十二世能化法住の項にある。

(9) 『埼玉図書館叢書第一篇』渡辺金造編、埼玉県立埼玉図書館、昭和七年。『金七十論疏操鏡』一卷もこの目録に見られ

る。

- (10) 『統豊山全書』 解題「豊山学匠著作目録」（昭和五十五年） 三二六頁を参照。
- (11) 『統豊山全書』 解題「豊山学匠著作目録」（昭和五十五年） 三二六頁を参照。
- (12) 『統豊山全書』 「金七十論疏解題」（北條賢三、昭和五十五年） 一八二頁を参照。
- (13) 『日本大藏經（増補改訂）』（『日藏』） 第九十八卷「金七十論備考会本」 解題二四頁を参照。
- (14) 『日本大藏經（増補改訂）』（『日藏』） 第九十八卷「金七十論備考会本」 解題二四頁を参照。
- (15) 清流紀談』（『新編 真宗全書』 史伝編一〇、昭和五十二年） 三八四、三八五頁および
『本願寺派學事史』（『新編 真宗全書』 史伝編一〇、昭和五十二年） 五七三、五七四頁を参照。
また桂潭に関しては、『真宗學苑談叢後編』（『新編 真宗全書』 史伝編一〇、昭和五十二年） 四九三、四九四頁にも
記述がある。

- (16) 『真宗學苑談叢初編』（『新編 真宗全書』 史伝編一〇、昭和五十二年） 四五八、四五九頁を参照。
- (17) 『日本大藏經（増補改訂）』（『日藏』） 第九十八卷「金七十論備考会本」 解題二四頁を参照。
- (18) 『日本大藏經（増補改訂）』（『日藏』） 第九十八卷「金七十論備考会本」 解題二四頁にも「蘆津実全が会本の本文に用いたのは、伝来の校本を豊山の快道が潤色したものである。」とあり、その「伝来の校本」については何も言及されておらず不明であるが、とにかく快道が何らかの形で関係している書が底本に用いられているようである。
- (19) 『日本大藏經（増補改訂）』（『日藏』） 第九十八卷「金七十論疏」 解題二七頁を参照。奥書の全文は以下の通り。

「安永七戊戌天潤七月、侍于講席之餘、自写此記、及令他書、而以自見聞、註於冠及傍、蓋為自念耳、不足外見焉
林常快蓮」

日本における『金七十論』とその注釈書について（興津）

日本における『金七十論』とその注釈書について（興津）

参考文献リスト

- 『仏書解説大辞典』第二巻
- 『国訳一切経和漢撰述部四三論疏部二三』「金七十論疏解題」、昭和三十三年
- 『サーンキヤ哲学研究』上、本多恵、春秋社、昭和五十五年
- 『三卷本浄土真宗教典志』巻第一（『新編 真宗全書』史伝編一〇、昭和五十二年）
- 『奈良朝典籍所載仏書解説索引』、木本好信編、国書刊行会、平成元年
- 『外道哲学』井上円了著、東洋大学井上円了記念学術センター編、柏書房、平成十五年
- 『日本大藏經（増補改訂）』第九十八巻「金七十論備考会本」 解題
- 『三康図書館椎尾文庫目録』（昭和五十六年）
- 『東北大学所蔵和漢古典分類目録』（昭和五十一年）
- 『大谷大学図書館和漢書分類目録』（大正十四年五月）
- 『林山文庫目録』（大谷大学図書館、昭和五十九年）
- 『瑞蓮寺文庫目録』（大谷大学図書館、平成十年）
- 『日比谷図書館・井上文庫目録』（昭和三十九年）
- 『国書人名辞典』
- 『国書総目録』
- 『豊山小史』田中海應編、大正十三年
- 『埼玉図書館叢書第一篇』渡辺金造編、埼玉県立埼玉図書館、昭和七年
- 『統豊山全書』解題「豊山学匠著作目録」、昭和五十五年

『統豊山全書』「金七十論疏解題」北條賢三、昭和五十五年
『清流紀談』(『新編 真宗全書』史伝編一〇、昭和五十二年)
『本願寺派學事史』(『新編 真宗全書』史伝編一〇、昭和五十二年)
『真宗學苑談叢後編』(『新編 真宗全書』史伝編一〇、昭和五十二年)
『真宗學苑談叢初編』(『新編 真宗全書』史伝編一〇、昭和五十二年)
『金七十論』村上平樂寺重梓、元禄十年
『金七十論備考』錢屋庄兵衛・村上勘兵衛刊、明和六年丑五月
『金七十論備考会本』大内青巒編、森江佐七刊、明治十九年

付記・『金七十論』の刊本(元禄十年と寛政七年の二本)、『備考』、『備考会本』については今西順吉教授の御所蔵本を拝借して検討することができた。また英文要旨についてはデレアヌ フロリン教授にご指導いただいた。両先生の学恩に感謝いたします。

As much as I could check, no less than 26 commentaries on the Ss (including texts no longer extant) were written during the Tokugawa Period. We know the names of 17 of these exegetes. For three of the commentaries, the authors' names have been lost. An important figure, which I also briefly discuss, is Nyokai Nichimyo 如海日妙 (?-1711) who appears to have written or edited the 'Postface to the **Suvarṇasaptatiśāstra*' 金七十論跋 attached to the woodblock print edition of the Ss issued in the Tokugawa Period. My paper also examines the texts and materials used by the scholar-monks associated with the Ss exegetical literature, the common corpus of knowledge shared by them as well as the distinctive characteristics of each of the available commentaries. I have paid special attention to the following three works which illustrate the philological methods of textual interpretation representative of this age: the *Kon shichijū ron bikō* 金七十論備考 by Gyō'ō Gonzō 曉應嚴藏 (1724-1785), the *Kon shichijū ron sho* 金七十論疏 by Chidō Hōjū 智幢法住 (1723-1800), and the *Kon shichijū ron sōkyō* 金七十論藻鏡 by Rinjō Kaidō 林常快道 (1751-1810).

*Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*

Summary

Traditional Japanese Commentaries on the **Suvarṇasaptatiśāstra* 金七十論

Kaori Okitsu

It is not unusual to see Buddhist texts mentioning and criticising other philosophical schools. Amongst these, Sāṃkhya and Vaiśeṣika have received particular attention. The fact that the **Suvarṇasaptatiśāstra* (hereafter, Ss), translated by Paramārtha 眞諦, and the **Vaiśeṣikadaśapadārthaśāstra* 勝宗十句義論, translated by Xuanzang 玄奘, are the only treatises of classical Indian systems rendered into Chinese and included in the Chinese Canon also testifies to the importance attached to these two schools.

The way Buddhist thinkers regarded Sāṃkhya philosophy can be grasped from two angles. One is to survey their criticism against this system as reflected in Buddhist philosophical works. The other is to examine how the Ss was understood and assessed in commentaries written by Far Eastern Buddhist thinkers. The latter approach has not been attempted so far, and the present paper is part of a larger project to explore this less known aspect in the history of ideas.

It seems that no exegetical work was written on the Ss in traditional China. By contrast, Japanese Buddhists showed considerable interest in this Sāṃkhya text. This can be seen as early as the Tenpyō Era (729–767), when the name of the Ss appears amongst the manuscripts copied by imperial order. We have no concrete data for the following centuries, but later, by the middle of the Tokugawa Period (18th century), the Ss became the object of an intense commentarial activity. Unfortunately, only very few of these works were printed and became available to the general public. Most of the rest has remained practically unknown to outside circles.